66

江戸時代の五行色体

誌上発表

木場由衣登
日本鍼灸研究会

「五行色体」は，「五蔵の色体」，もしくは「五行色体表」と称され，人体の事象を五行に従って分類した一覧表である．これらは一見『黄帝内経』からの引用または要旨に見えるが，江戸初期の鍼灸から現代日本へ好まれて継承された記載法である．今回は，江戸時代の「五行色体」と現代への変遷について言及したい．

体裁が「五行色体」と同様の最も古い記載は『千金要方』巻二十九・針灸上・五藏六府變化傍通訣第四の56条（『孫真人千金方』巻第二十九・五藏六府変化傍通法第四は53条）の所謂「傍通」に始まる．次いで『外台秘要方』巻第三十九・五臓六腑変化流注出入旁通では80条が記載される．『千金』『外台』どちらも鍼灸の巻であり，五蔵と鍼灸病證の深い関係を示唆する．劉完素『素問要旨論』巻三・六氣變用篇第三に見られる「五行傍通」は運気論の要約である．『千金』の傍通は，尾張医学館・浅井正封が『千金要方』の「五藏六府変化傍通訣」，『万病回春』八巻の「諸病主薬」，『十四経発揮』三巻の「十四経穴分寸歌」の三篇を合綴して刊行（天保10年）しているが，臨床的意義は不明である．

「色体」と表記される最も古い記載は，著者未詳の『鍼灸抜萃』延宝4年（1676）の「五臓之色体」であり，これには五蔵，五行，五腑，五根，五主，五支，五募，五親，五季，五方，五柄戸，五色，五香，五味，五液，五志，五変，五精，五悪，五声，五役，五音，五調子，生數，成數，五經の27条が五行の順に記載される．『鍼灸抜萃』には異本が多く，貞享2年刊本，元禄9年刊『合類鍼灸抜萃』（縦長袖珍本），これと別に明和5年刊本，元禄9年刊の李遷校『広益鍼灸抜萃』（横長袖珍本）等がある．安井昌玄著『鍼灸要歌集』（元禄8年）にも『鍼灸抜萃』と同じ「五臓色體」が記載され，本郷正豊著『鍼灸重宝記』（寛延2年）には「五藏の色體」という『抜萃』系統の「五臓之色體」から14条を削った13条が記載される．『抜萃』系統の編纂者は，本郷正豊も含めて，無分（御薗）の末流と言われ，江戸期の御園意斎と関係があると思われる．無分・意斉流関連の鍼灸書を見ると，『意斉流針秘伝』（慶安4年序）と『意斉流針書』（正徳3年奥書）にも色体らしき記載が見られる．

『意斉流針秘伝』には，『鍼刺提要』巻上・下の濱野生之伝「易学四十八ヶ条」（実際は46条）中の10条に色体的記載（五行，五気，五音，五色，五味，五臭，五臓，五蟲，六気，五星）がみられた．

『意斉流針書』は，五根惣通之巻に37条の記載があり，『抜萃』の色体と比較すると20条が合致する．五募，五親，五悪，五役，五調子，五経の6条が『意斉流針書』に記載されないが，『抜粋』の殆どを網羅する．『意斉流針書』の五運（木・丁壬など），五面，五属，五所，五腹（『難経』十六難と近似），五肢，五時，五目，五牙，五難，五善，五椎（『千金』五臓腧と同じ），五形，五積（『難経』五十六難）の17条は独自の記載である．『意斉流針書』の五形「團形・三角・四角・半月・圓形」は，仏教もしくは弓術の書と合致する記載がある．『外台秘要方』にも「五形」が見えるが，これは「直，鋭，曲，法，円」で，方陣と円陣のみ『孫臏兵法』八陣法にも見えが，『武経総要』（北宋・慶暦4年）等の「有直陣，鋭陣，曲陣，方陣，圓陣，以法五行」（五行の陣）と合う．その他，入江流の『中務御相伝針之書』にも三種の色体表的内容（6条，6条，10条）が記載される．

『鍼灸抜萃』の「五臓之色體」は沢田流灸法に引き継がれ，『鍼灸真髄』（代田文誌著，昭和16年）の「五臓之色体」として『抜粋』の色体がそのまま引用される．『鍼灸治療基礎学』（代田文誌著・沢田健校訂，昭和15年）の「五臓の色体」には「五穀，五畜，五菜，五果」が増補される．「五行色体」を通して，江戸時代初期の鍼灸が，現代鍼灸のテキストに継承されているとも言える．